３　除草剤の利用

草地の維持管理においては、基幹草種に適した刈り取り・放牧管理を行い、基幹草種の生育を旺盛に維持し、裸地を作らないことが重要です。適正な施肥管理で、肥料不足による主要草種の衰退や、多肥による過度な株化を回避することも大切です。そのうえで、雑草の防除を行っていきます。

（1）ギシギシ類の防除

維持草地でギシギシ類が生育してきた場合、個体数の少ない内は初春の融雪後、地面が乾燥して締まる前に抜きとったり、個体への除草剤のスポット散布でも対策できます。

ギシギシ類が増殖してきた場合は、表Ⅳ-36 の通り選択制除草剤による茎葉処理で防除します。

表Ⅳ-36　除草剤の種類と特徴

対象草地	商品名 ［有効成分名及び含有量(%)］	使用時期	10a 当たりの使用量	使用回数	注意事項
イネ科主体草地	アージラン液剤 ［アシュラム 37.0%］	・秋処理 ・ギシギシ類の栄養成長期（但し、最終採草後） ・10 月上～中旬	新播草地 200～300ml	1	1.新播草地において夏・秋は種草地への散布は避ける。 2.当年はギシギシ類の黄化のみで翌年春に枯死する。 3.秋散布は最終採草後に行う。 4.散布後 14 日間は放牧を行わない。
			経年草地 300～400ml		
イネ科単播経年草地 アルファルファとの混播草地	ハーモニー 75DF 水和剤 ［チフェンスルフロンメチル 75.0%］	・夏処理及び秋処理 ・夏播種牧草定着後 ・ギシギシ類の草丈 20 ㎝以下	新播草地 0.5～1.0 ｸﾞﾗﾑ（散布水量 100L）	1	1.新播・経年草地ともにクローバに対する薬害が著しい。なお、新播草地でのアルファルファ（主体、混播）草地における試験例はない。 2.経年草地は、イネ科単播経年草地及びアルファルファとの混播草地が対象。 3.ギシギシ類の葉が展開してから行う。 4.散布後 21 日間は採草及び放牧を行わない。 5.使用後できるだけ早く専用の洗剤等で洗浄する。 6.経年草地の夏処理についてはイネ科牧草についても生育抑制が見られることがあるが、夏期高温時の薬害の程度はアージラン液剤に比べ少ない
		・夏処理及び秋処理（採草 21 日前まで）	経年草地 3 ｸﾞﾗﾑ	1	
イネ科単播草地	バンベル D 液剤 ［MDBA 50.0%］	・秋処理 ・ギシギシ類の栄養成長期 ・秋期最終刈取り後 30 日以内	経年草地 75～100ml（散布水量 100L）	1	1.マメ科牧草には薬害を生じるので、イネ科経年草地で使用する。 2.秋期散布した牧草は使用しないこと。

（2）ギシギシ類の防除事例

別海町のギシギシの目立つ草地で令和４年 10 月 7 日にチフェンスルフロンメチル剤（商品名；ハーモニー75DF 水和剤）を秋に散布し、経過を観察しました。その結果、除草剤散布後約１週間で葉が変色し、６ 週間で見かけ上ほぼ枯死しているように見受けられました（図Ⅳ-19）。

除草剤散布前（10/6）のギシギシの状態

スプレーヤーで除草剤を散布

10/14 やや変色した

10/21

10/28

11/4

11/11

11/18　ほぼ枯死状態

11/25

12/2　土壌は凍結

12/9

図Ⅳ-19　除草剤を散布したギシギシの変化